

〈アサマ製作所〉。

それは東方大陸に居きよを構える、ゾイドの修理と改修を主な業務とする企業である。現在は創始者の孫であるサチエ・アサマが二代目社長を務めており、〈ゾイテック社〉のような大企業とは比べるまでもないが、個人経営のゾイド関連企業としては、知名度も実績も東方大陸ではトップだった――

〈L・C・ファクトリー〉が立ち上がるまでは。

〈L・C・ファクトリー〉の経営者であるロゼット・コダールは、技術者としての腕はもちろん、女性としての魅力も兼ね備えた人物だった。マスコミはこぞって彼女を取り上げ、瞬く間にロゼットの存在は世間に知れ渡った。

大衆は判りやすい偶像アイドルや記号アイコンに弱い。

美人で才媛さいえん――いかにも大衆が好みそうな人物像キャラクターだ。

多くの同業者はお飾りで祭り上げられた、形だけの経営者だと思っていたが、しかしロゼットは本物だった。腕試しや道場破りのつもりで彼女と対談をした技術者は、例外なく彼女の才能を認め、むしろファンと呼んでいいほど好意的になつて帰つていった。

更に、ロゼットが手掛けた〈ジェノクラウエ〉を始めとするゾイドを愛機とした傭兵達が立ち上げた民間軍事会社P M Cの活躍もあり、当初は彼女の存在だけが人々の間に広まっていたが、〈L・C・ファクトリー〉としての認知度が高まるのに時間はかからなかった。

今では〈アサマ製作所〉を大きく引き離し、ゾイド関連の中小企業では〈L・C・ファクトリー〉が事実上のトップとなっていた。

それを同業者が快こころよく思わないのは致し方あるまい。悔しがるのは当然だし、競争こそが向上を促うながす。

しかし、それを刺激として自らを高める努力をする者がいる一方で、相手の足を引っ張る事で相対的に高みに立とうとする者が現れるのも、悲しいかな、致し方ない事なのかもしれない。

例えば、彼女のように――

「随分と集まったわね。それだけ、あの女に恨みを持つてる奴が多いって事でしょうけど」

手元の個人端末タブレットに視線を走らせ、サチエ・アサマは満足そうに唇くちびるを歪ゆがませ

た。

A4サイズほどのモニターに表示されているのは、顔写真と簡単なプロフィールが記された履歴書のようなもので、サチエが一枚ずつスクロールするのを終えらると、それらは小さな一覧表示に切り替わった。約三十人ほどのプロフィールに共通しているのは、彼等が全員ゾイド乗りである事。

「……………」

サチエの発言に、彼女に個人端末を渡した男性は無言を返した。年齢は五十手前といったところだろうか、確実にサチエよりは年上だろう。無表情であろうとしているが、複雑な胸の内を隠しきれていないのは明らかだった。

「……何か言いたそうね」

男性の表情に気付き、サチエが訊ねる。声を荒げている訳でも、険しい表情をしている訳でもないのに、彼には詰問されているように感じられた。

「……………いえ」

「おじい様の代から社長補佐をしてきている、愛社精神に溢れる社員の陳情だもの、現社長として無下にはしないわ」

サチエにしてみれば聖母の笑みを浮かべたつもりだろうが、男性——社長補佐には彼女の目が笑っているようには見えなかった。なまじ美人である分、余計にその笑みは凄絶さを増す。前社長の補佐をしていた頃から、点での付き合いではないが、彼女の事も幼い頃から知っている。以前はこんな笑顔を浮かべる娘ではなかった。

「……………お嬢様——」

「社長、でしょ？」

すうっと笑みが消え、能面のような表情でサチエは社長補佐の言葉を遮った。

「……………申し訳ありません、社長」

「いいわ。で、何？」

笑みを浮かべ直す事もせず、サチエは社長補佐に続きを促す。

彼はこの瞬間に確信した——もう手遅れで、彼女には何を言っても届かない。

「……………この件が済みましたら、長期休暇を戴きたく思います」

「そう。いいわ、この機会に有休を消化してきなさい。旅行なんていいんじゃないかしら？　もうすぐ学生は夏休みでしょうし、家族で。良いわねえ、家族旅行」

サチエに他意はないかもしれないが、社長補佐には『家族』という言葉が強調されているように聞こえた。妻と二人の娘。彼にとって、それらは何よりも優先

すべき存在である。

「ただし——この件が終わったらね」

サチエの一言一言に圧を感じる。別の意味が含まれているように深読みしてしまふ。考えすぎだ。ヤクザやチンピラじゃあるまいし、家族を人質に社員を恫喝^{どうかつ}など、まるで創作^{フィクション}だ。

しかし社長補佐は、そう思えなかった。今のサチエなら、やりかねない。彼女が、半ば正気を失っているように思えてならないのだ。

だから——

「……はい、ありがとうございます」

胸の内を明かす事なく、彼は一礼して社長室を出た。

次期社長の座を辞^じして、恩義のある社長の孫を数年に渡って補佐してきた。

どこで間違えてしまったのだろうか——『社長室』と書かれた^{プレート}札をじっと見上げ、彼は暫^{しばし}しの間、その場に立ち尽くした。

とある九尾狐の邂逅

アニメマウルペス

カム・アクロス

アニメマウルペス誕生篇 (中編)

「L. C. ファクトリー」が人々の行き交う街の中心部からは離れた、郊外にあるのには理由がある。それは演習場の存在だ。演習場といっても何らかの設備がある訳ではなく、ただ何もない広大な面積の土地を、「L. C. ファクトリー」の人間が『演習場』と呼んでいるだけなのだが、そう呼べるだけの役には立っている。ゾイドだけでなく、装備やシステムの開発も行っているとはいえ、最終的にはそれらをゾイドに積んで試験を行う必要がある。そのための場を近くに所有出来るという利点は大きい。

問題があるとすれば、郊外にあるため通勤に若干の難がある点だろう。経営者であるロゼットを含め、独り身の者はほとんど付属の寮に住んでいるのだが、家庭がある者はそういう訳にもいかない。今のところは従業員のために、始業前と終業後に無料でバスを手配して対応しているが、何らかのトラブルで乗り損ねる者は当然いる。かといって、便数を増やすのは資金的に厳しく、それで万事解決ともいかない。

「瞬間移動が出来ればいいんだよね。『どこにでもドア』とか」

演習場の中心で、娘は白亜の機体に冗談めかして言った。

彼女こそ「L. C. ファクトリー」の経営者にして最高責任者、ロゼット・コダールその人である。金色の長い髪と、穏やかな性格そのままの青く澄んだ瞳。整った容姿もさる事ながら、その女子大生然とした雰囲気から、一企業の社長に相当する肩書を誰が想像するだろうか。

「なんてね」

傍らに立つ白亜のゾイド——通称「ハクメン」が、反応に困っているのを察し、ロゼットは苦笑を浮かべながら言った。十万年以上の時を眠っていた古代種が、こんな戯言に戸惑っている。それを申し訳なく思いつつ、どこか可愛らしくも感じたのだ。

一年ほど前に発見されたキツネ型野生ゾイド。

化石化していたそれは、仮面を思わせる頭部の形状から「白面」と呼ばれ、戦闘機械獣化された今もそう呼ばれている。大きさは同じキツネ型である「シヤドーフォックス」とほぼ同じだが、ゾイドコアの出力は並みの大型ゾイドを軽く凌駕する。

諸事情あつて完成まで随分と時間がかかってしまったが、先日ようやく起動まで漕ぎつけたのだ。

予定を大幅に繰り上げ、今日は午前中から「ハクメン」の各種テストを行い、すでに実弾を使った火器管制装置のテストと、Eシールドの展開テストを終えていた。今は昼休みを挟み、午後のテストに備えている最中である。

従業員達に無理を言つてまでテストの消化を急ぐのには理由があつた。

それは昨日、リック・ルッケンスから齎された情報に端を発する。

「――〈L・C・ファクトリー〉は狙われている」

リック・ルッケンスは真顔でそう言った。

百八十センチの長身。くすんだ金色の長髪。チャライ印象もあるが、大人の色気を感じさせる三十五歳。外見と雰囲気から、誰もがホストのような職業を想像するが、彼は情報屋を生業なりわいとするゾイド乗りである。

「……リック君、大丈夫？ 病院、行く？」

無駄に良い声で言われ、すぐに真顔からドヤ顔に変わったのがイラツとしたので、ロゼットは笑顔で背後の病院を指してそう返した。

ハン・カミジヨウとリン・ユズキの見舞いを終え、ロゼットが病院を出るなり彼が待ち伏せしており、疲れる一悶着の末、リックはようやく本題に移った。その一言目があれでは、ロゼットが珍しく毒舌どくせつになるのも致し方ないというものだ。

「ひどいなあ、ロゼット。でも、君が診断してくれるなら是非もない。お医者さんプレイ、嫌いじゃないよ？」

美声で、決め顔で、ウインクのおマケ付き。

モテる要素に事欠かないのに、リックの女性からの評判が地に落ちている原因のひとつがこれである。要は残念な男なのだ。

多くの女性が第一印象で彼にときめき、一瞬でその熱は氷点下まで下がってしまう。この急激な感情変化を、新たなエネルギー開発に利用出来できないか考えてしまう技術者もいるとかいないとか。

無駄に良い容姿。無駄に良い声。残念な中身。

やはり、天は二物を与えないのだろう。

「もう帰っていいかな？」

「ああ、いや、そういう反応ももつともだ。けど、本当なんだよ。〈アサマ製作所〉、知ってるよね？」

ロゼットが本格的にイライラしてきたのをようやく察したのか、リックはやや真面目な声調トーンで言った。

「もちろん知ってるけど」

「君、あそこの二代目社長さんに目の敵かたきにされてるだろう？」

創始者であり前社長の孫、サチエ・アサマ。ロゼットと同じ三十二歳。同じ業界にいれ

ば顔を合わせる機会はあるし、〈L. C. ファクトリー〉を立ち上げる以前、ロゼットはすでに社長となっていたサチエにスカウトされた事がある。丁重に断った後も、彼女からは何度か共同プロジェクトの打診があったが、それらもすべて結果的に実現しなかった。

今では〈L. C. ファクトリー〉が〈アサマ製作所〉を大きく引き離して、ゾイド関連の中小企業としてはトップの座についている。逆恨みであっても、目の敵かたきにされる理由としては充分だろう。

「それで、アサマさんが〈L. C. ファクトリー〉を狙ってるっていうの？ 私個人じゃなくて？」

「君をギャフンと言わせるなら、君自身より、君の大切なものを奪う方が効果的だろ？」

「『ギャフン』って……。それはそうかもしれないけど、なんで今になって——」

はつとなり、ロゼットは今このタイミングである理由に気付いた。

「〈ハクメン〉……？」

「加えて、戦力の低下もあるだろうね」

リックの言う戦力というのは、入院中のハンとリンの事だ。どちらもロゼットの自信作と言える高性能機を愛機としているが、搭乗者が不在では意味がない。彼等の所属する民間軍事会社は P M C アイコール 〈L. C. ファクトリー〉の戦力という訳ではないが、拠点である事は間違いない。

「でもどうして……二人の入院については多少は仕方ないけど、それでも知ってるのは、うちの従業員と、入院先の病院関係者くらいのはず。〈ハクメン〉に至っては、完全に機密扱いなんだよ？」

ゾイドに関する発見を、軍や公的機関に報告しなければならない義務はない。古代種とはいえ、他人の私有地などで見つけた訳でもなければ、発見者に所有権が与えられる。余計な横槍よこやりを入れられる危険リスクを負ってまで、不必要に公表する利点メリットもない。

「理由は判らないけど、何らかの方法でアサマ社長は古代種の存在を知った。それを奪うなら、このタイミングだと思った。そういう事だろうね」

「そうだね、今は対策を考える方が先決か……もつと詳しい情報、あるんだよね？」

「それはもちろん。僕は〈戦う情報屋さん〉だからね」

我が意を得たりとばかりに得意顔を浮かべるリック。人格に問題はあっても、情報屋としては優秀な人物なのだ。

「くくく」

「嫌だなあ、ロゼットからお金なんて貰もらえないよ。今日は友人として、君のピンチを報せるために来たんだから」

「えー……」

「え、何その反応、ちよつと本気で傷付くんだけど……」

ロゼットは相当、胡散臭うさんくさそうなものを見る目をしていたのだろう。リックは珍しく言葉通りの表情を浮かべていた。



昨日の事を思い返しつつ、ロゼットはリックから齎もたらされた情報を整理する。

〈アサマ製作所——というより社長、アサマ・サチエ個人の怨恨えんこんによる襲撃計画がある。〉

目的は古代種〈ハクメン〉の奪取。

戦力はゾイド約三十機。

決行は三日後（日付が変わったので、実際には明後日あさうて）。

一応、対応策は講じてある。だが、間に合わなかった場合に備え、迎え撃つ用意はしておかねばならない。そのために〈ハクメン〉を完全な状態にしておく必要がある。

「……………」

選択肢はもうひとつある。〈ハクメン〉を〈アサマ製作所〉に引き渡す事だ。そうすれば争いは避けられる。

普段のロゼットであれば、そうしていただろう。理不尽だろうと何だろうと、それで無駄な被害を出さずに済む。

しかし、〈ハクメン〉を引き渡すのだけは嫌だった。

貴重な古代種だとか、替えが利かないとかいう理由ではない。

単純に——見つけた者の責任として。

ロゼットが見つけて、永い眠りから目覚めさせた。

ならば、最後まで面倒を見る責任がある。

（あなたは私が護まもるから……）

傍かたわらに無言で立ち続ける白亜の機体を見上げ、ロゼットは内心でそう呟つぶやいた。



ロゼットと〈ハクメン〉からは、やや離れた位置に三機のゾイドがいた。青いカラーリングを施ほどこされた〈レッドホーン〉と、通常カラーの〈ベアフアイター〉と〈ブラックラ

イモス)。これから行われるテストで（ハクメン）の相手を務める、（L. C. フアクトリー）警備部に所属するゾイドである。彼等の本来の任務は部署名の通り警備だが、時折、こうしてテストに駆り出される事も多い。

「……可憐だ」

そう呟いたのは青い（レッドホーン）の搭乗者であるドミニク・ダナーだった。距離があるにも関わらず、彼の目は愛機を見上げるロゼットの表情を鮮明に捉えていた。

「うわあ……隊長、正直キモいっす」

ドミニクに向かって半眼で言ったのは、彼と同じく警備部に所属するユナ・アラサキだ。見た目だけで言うなら完全に『ギャル』である。ラフに着崩した学生服を思わせる服装。派手な金髪。これで日焼け顔なら完璧だが、さすがにそこまではしていない。また若年の二十二歳とはいえ、そのくらいの分別はあるらしい。

ちなみに、彼女がノーマル仕様の（ベアファイター）の搭乗者である。

「……………はあ」

ユナを一瞥し、これ見よがしに大きな溜息を吐くドミニク。

「ちよ、何すか、そのわざとらしい溜息。ケンカ売ってんすか？」

「いや、すまない。人間ってのは不平等だなんて、悲しくなっただけだ」

「はあ!? 何がどう不平等なんすか!?」

「いいんだ。もういいんだよ。うん、仕方ないんだよな」

ものすごい剣幕で迫るギャルに対し、ドミニクは同情めいた優しい笑みで対応する。お前の苦しみは痛いほど判る——とでも言うように。

「あーしとロゼット主任、何が違っつて言うんすか!? ちよつと美人でスタイルが良いだけじゃん!?」

「主任を『ちよつと』と言うなら、お前は『全然』——あ、すまん！ 悪かった！ 俺、残酷な事言っちまっつて……本当にすまん!!」

わざとらしく大袈裟に、いかにも失言だったとドミニクは平謝りして見せるが、もちろん悪かったなどとは微塵も思っていない。それは見る側にも明らかで、ユナにしてみれば挑発以外の何ものでもない。

「マジありえないんだけど!? 最悪！ 主任に相手にされない訳だわ!!」

「ああ!? まだアプローチすらしてねえよ!」

「よかったじゃないっすか。どうせ玉砕して恥かくだけっしょ。うひひ」

「っ。あー、やだやだ。これだからガキは」

「嫌っすねえ。これだからオッサンは」

「……………」

「……………」

無言で睨み合う中年とギャル。互いに次はどう相手を馬鹿にするか考えているのだろう。

「おい、ケイゴ！ 黙ってないでお前もこの色気も可愛げもない女に何とか言っておれ！」

「そうよ、ケイゴ！ あーしがどれだけ良い女か、この見る目のないオッサンに言っただけよ！」

気配を消すかのように、ずっと黙って我関せずを貫いていた青年に火の粉が及んだ。ケイゴと呼ばれた彼も、二人と同じ警備部に所属している。フルネームはケイゴ・タキザワ。

中肉中背。黒髪黒目。東方大陸人の特徴そのまま、容姿は至って平凡。

当然だが、残った彼がノーマル仕様の〈フラックライモス〉の搭乗者である。

「——隊長は立派な方だ。少なくとも、ゾイド乗りとして尊敬に値する」

朴訥とした口調だが、ケイゴのはつきりとした物言いは妙に説得力があるというか、思わず頷いてしまう静かな迫力がある。実際、彼の言葉にユナはむっとし、ドミニクは満足げだ。

「ユナ。あくまで隊長の守備範囲外というだけで、お前に魅力がない訳じゃない。確かに小柄で色気はないかもしれないが、少なくとも、俺はお前の事を可愛いと思っている」

「へっ!？」

続けて、ケイゴは変わらず無表情のまま、淡々とユナに対する補助を入れた。照れくさそうに顔を赤らめたりでもすれば告白とも取れるが、ただ事実を語るような口調で言われると、他意はないようにも聞こえる。

「それじゃあ不満か？」

「え、あ、その……………ううん」

ケイゴの朴訥な、しかし真つ直ぐな瞳を向けられ、ユナはドミニクに向けていた剣幕が嘘のように、もじもじと俯いた。

「ケイゴよ……………お前、やっぱすごいわ。いろんな意味で」

「恐縮です」

ドミニクの言葉を純粹に賛辞と受け取ったのか、ケイゴは生真面目に礼を言った。

ケイゴとユナ——幼馴染らしい——が共に警備部に入り、一年以上が経った。こういつたやり取りもすでにお約束となりつつあるが、彼の朴訥とした性格には未だに慣れない。逆にユナは判りやすすぎるので、そういう意味でのバランスはとれているとドミニクは感じている。バランスを取る必要があるかは疑問だが。

「けど隊長。ロゼット主任は駄目っしょ。犯罪っすよ？」

「なんでだよ。お前、主任が未成年だと思っつてんじゃないだろうな？」

さすがにもう喧嘩腰ではないため、ユナの言葉にドミニクは普通に返した。ちなみに、東方大陸で大人が未成年に手を出した場合、相手の合意があっても法的には犯罪となる。

「さすがに、あーしより年下だとは思っつてないけど、歳が離れすぎじゃないかって話っすよ」

「ユナ、ロゼット主任は三十二歳だ。これは普通に公表されてる」

「え!? そうなん!? 主任、パネエ……」

ケイゴの言葉に、ユナは驚きを隠せないようだ。「自分の組織のトップの年齢くらいは知っつてろよ……」というドミニクの呆れた声も届いていない。

「いやいや! それにしたって隊長とじゃ離れすぎでしょ?」

「……お前、俺をいくつだと思っつてる?」

「え? 五十……手前くらい?」

間があつた事を考慮するに、気を遣つて『手前』と言つたのだろう。つまり、ユナはドミニクが五十代だと思っつているのだ。

「ユナ、隊長はまだ三十六歳だ」

「……マジで?」

そろりとユナがドミニクに視線を向ける。案の定あんなじょうというか、其処そこにはふるふると身を震わせる修羅しゆらがいた。怒りを抑えようと無理に笑みを浮かべようとしているのが余計に怖い。

「……隊長、ガンバ☆ あーし、応援してっつすよ!」

「うるせえんだよ、馬鹿野郎!」

ほどなくして午後のテストが開始された。



「それでは——今日のテスト、おつかれさまでした」

ロゼットの音頭おんじとによって、計四つのグラスが掲げられた。

「おつかれさまです」

「うえーい!」

ドミニク・ダナーは緊張気味に、ユナ・アラサキはテンション高めに、ケイゴ・タキザ

ワは無言で会釈えしやくをし、ささやかな乾杯が行われた。

時刻は午後七時。

場所は〈L. C. ファクトリー〉の食堂である。

寮住まいの者も多いため、夜でも利用可能な上、^{ファミレス}家族向けの飲食店並みのメニューが揃^{そろ}っており、一応、アルコール類も置いてある。

〈ハクメン〉のテスト終了後、ロゼットは〈アサマ製作所〉による襲撃計画の相談をするためドミニクに声を掛^かけたのだが、どうやら食事の誘いと勘違いされたらしく、ユナとケイゴも同席する事になったのだ。

「隊長。せっかく一人きりになるチャンスだったのに、なんで、あーし等^ら誘^よってんすか？」

「ぼつか、お前……まだ心の準備^びってものが」

「うわあ、とんだヘタレ野郎っすね」

ドミニクとユナが何か話しているが、声を潜めているためロゼットには聞き取れなかった。ちなみにケイゴは無言でサラダに手を付けている。

立場上、あまり警備部の人間と交流はない。ドミニクは警備部を立ち上げた時点からいる最古参で、部長——部内では『隊長』と呼ばれているようだが——という立場もあり、比較的、会話をする機会が多いが、他の二人と話すのはほぼ初めてだ。

「主任、質問いっすか？」

「お前、もうちょつとまともな敬語をだな」

「気にしないでください、ダナー部長。もう勤務時間外ですし」

「そうつすよ、隊長。ぶれーこーでいいじゃないっすか」

「はあ……」

こいつ『無礼講』って書けないんだろうな——そんな表情をユナに向けるドミニク。

「アラサキさん、質問って？」

「ユナでいいっすよ」

^{ものお}物怖^{おそ}じしないユナに対し、ロゼットは不思議と好感が持てた。

「テストでの〈ハクメン〉の動き、すごかったっす！ 主任、前からゾイドに乗ってたんすか？」

午後のテストでは、まず最初にユナの〈ベアファイター〉が相手だった。火器を使わない近接戦闘を通じて、どれだけ〈ハクメン〉を動かせるかを確認するためのものだ。その後、模擬弾を使った二対三の実戦形式でのテストを行った。ここでの勝ち負けに意味はないが、どちらもロゼットの操縦は熟練のゾイド乗りのそれだった。

「そういう訳じゃないよ。あれは〈ハクメン〉に積^Aんだ〈オート・リアクション・システム^{R S}〉のおかげ」

〈A・R・S〉。

それは、けしてゾイド乗りとしての技術が高くないロゼットが、〈ハクメン〉を使いこなすために考案したシステムである。一流のゾイド乗りの動きを記憶させ、戦闘時に搭乗者が任意に、もしくはゾイド自身が必要に応じて、記憶された動きを行うというものだ。

「高度な知能があつて、記憶された動きを実行出来るゾイドじゃないと、意味がないんだけどね」

「じゃあ、あーしのベアちゃんじゃ無理っすかね……」

ユナは愛機に〈A・R・S〉の搭載を期待したのだろう。判りやすく落胆してしまつている。

「――主任。自分も質問、よろしいでしょうか？」

静かに、よく通る声を発したのはケイゴだ。生真面目に、ぴしっと姿勢まで正している。

ここが軍隊なら敬礼でもしそうな雰囲気である。

「どうぞ？」

「ひよつとして、その動きを担当した一流のゾイド乗りというのは、イカルガ女史じよしでしょうか？」

ファルナ・イカルガ。

ロゼットの幼馴染おきななじみにして、友人であり、姉のような存在。

ロゼットが設計した〈バニッシュラプター〉の搭乗者でもある。

本来は傭兵だが、戦争が終結した今は民間軍事会社P M Cを立ち上げ、ハンとリンも其処そこに所属している。〈L・C・ファクトリー〉とは業務提携のような関係を結んでおり、そのため時々、警備部に教導を行う事もある。

〈ハクメン〉の動きと今の話から、ケイゴは〈バニッシュラプター〉の挙動を連想したのだろう。四足獣と二足獣で挙動は違うが、操縦者の動き――本質の部分は共通している。これがファルナのすごいところで、二足獣だろうと四足獣だろうと、大抵のゾイドは乗りこなせてしまうのだ。

「正解。タキザワ君は良い観察眼を持つてるね」

「いえ、あまりにそのままだったものですから。隊長も気付かれたのでは？」

ロゼットの賛辞に眉ひとつ動かさずケイゴは謙遜けんそんして、ドミニクに水を向けた。

「まあな」

ドミニクも、テストでの〈ハクメン〉の動きがファルナのそれに似ていると思つていたらしい。

「あはは。うん、まあ、その通りなんだよね」

一流のゾイド乗りと同じ動きが出来れば、そのまま一流のゾイド乗りになれるという訳ではない。それはしよせん、真似まねでしかなく、完璧であるほど動きが読まれやすいという事でもある。ファルナ自身も、「こんな子供だましが通用するのは、せいぜいが一流まで」と言っていた。

「仕組みが判タつてしまえば、次はもう通用しないかな」

「……すみません。そんなつもりはなかったのですが」

苦笑を浮かべるロゼットに、心なしか、ケイゴは戸惑ったように謝罪の言葉を告げた。

事実とはいえ、上司の技術を批判してしまったと感じたのかもしれない。とことん生真面目きまじめな性格らしい。

「気にしないで。まだまだ改善の余地があると判タつて、良い収穫とくだったよ」

「けど、そんな参考にされるくらいすごい人なんすね、ファルナ姐ねえさん」

「『少佐』の肩書かたがきは伊達だてじゃねえってこった」

ドミニクが発した『少佐』という言葉にユナが食い付いた。

「姐ねえさん、軍人だったんすか？」

「いや、ハンと同じで前の戦争の時、ガイロス軍に傭兵として参加してたんだよ。詳しい経緯は知らんが、そん時に『少佐』の肩書かたがきを貰もらって、未だいまに軍に影響力があるのかなんとか」

「マジっすか……」

他にも〈絶影ぜつえい〉という二つ名があるのだが、本人が気に入っていないため、ロゼットは伏ふせておく事にした。

それからも思いのほか会話は弾はみ、料理の食器がすべて下げられた頃、ロゼットは本題に入る決心をした。

「——ダナー部長」

「え？ なんです、改かまって……」

ロゼットの雰囲気が変わったのに気付いたらしく、ドミニクはやや赤ら顔——酒は乾杯の際の一杯だけだったが、あまり強くはないらしい——だったが、彼女に引きずられる形で妙な表情になった。

「仮に〈L. C. ファクトリー〉が戦場になった場合、実戦に出せるメンバーはどれだけいますか？」

「……ねえ、何の話？」

「判はらんが、今は口を挟はむな」

ユナを制してくれたケイゴに内心で礼を告げ、ロゼットは警備部部長の返答を待った。

「想定される敵の戦力は？」

「約二十機」

「……………すべて小型と中型で編成されていると仮定して、戦力になるのはこの二人くらいでしょう。ほかのメンバーの練度では厳しいでしょうな」

警備部に在籍しているゾイド乗りは当然、他にもいる。だが、実戦経験があるのは部長のドミニクのみで、ロゼットの期待に応えられそうなのはこの場にいる者だけらしい。午後のテストをする際、ドミニクには『腕の良い者を』とリクエストしたので、当然と言えば当然なのだが。

「そうですか…………」

戦力が多い方がいい。だが、無駄死にすると判った者を戦力に組み込む訳にはいかない。それでは間接的にロゼットが殺したも同然だ。

「あのお、話が見えないんですけど…………」

急に重たくなった空気に耐えきれなくなったのか、ユナが彼女にしては控えめな調子で言った。ドミニクとケイゴも内心は同じだろう。

ロゼットは氷の溶けきった水が入ったグラスを口に運び、唇を湿らすと、意を決して告げた。

「——明後日、〈L.C. ファクトリー〉に襲撃があります。目的は〈ハクメン〉の奪取です」

隠し立てしても仕方がない。ロゼットに、騙すような形で彼等を巻きこむつもりはないのだから。



〈アサマ製作所〉 社長室。

部屋の主であるサチエ・アサマは、何をするでもなく、ひたすら人差し指の腹で執務机を叩くという行為に没頭していた。〈L.C. ファクトリー〉に対する襲撃計画を明日に控え、仕事が手につかないのだ。アナログ時計の秒針が時を刻む音に、自然と指を動かすリズムが重なる。

カチカチ。タンタン。

虚空を見つめ、ひたすら秒針に合わせて指で机を叩き、リズムを刻む。

カチカチ。タンタン。

カチカチカチカチ。タンタンタンタン。カチカチカチカチカチカチカチカチ。タンタン

続くのは輸送用ゾイドの代名詞〈グスタッフ〉。牽引している荷台には四足獣型と思われる中型ゾイドが積載されており、申し訳程度に薄布で覆われている。

〈グスタッフ〉を間に挟むように並走しているのは、〈ベアファイター〉と〈ブラックライモス〉。

〈L. C. ファクトリー〉警備部のゾイドと、ロゼットが搭乗する〈ハクメン〉である。

二日前、ロゼットが明かした襲撃計画の存在に対し、警備部部长であるドミニクは彼女の意思に従う事を表明。部下であるケイゴも同意し、ユナは彼に付き合う形で、消極的なながらも協力してくれる事となった。

彼等から出た対応策は三者三様だったが、ユナの和解案は真つ先に提案されて却下された。情報屋リック・ルッケンスからの情報だけで、なんら証拠となるものがない以上、治安機構は頼れない。〈アサマ製作所〉——というか、首謀者であるアサマ・サチエにこの件を告げてもしラをきられるか、最悪、此方の準備が整う前に計画を前倒しされる恐れがある。

ドミニクの『先手を打つ』というのも、やはり現実的ではない。証拠がない以上、むしろ此方が犯罪者となってしまう。

そんな中で妙案を挙げたのは、意外にもケイゴだった。ロゼットは迎撃準備を整え、〈L. C. ファクトリー〉で迎撃撃つつもりだったのだが、彼は〈ハクメン〉を運び出し、街の外で迎撃撃つ事を提案したのだ。

これなら施設への被害を考慮せずに済む。襲撃の動機がロゼットに対する怨恨である以上、古代種の奪取のドサクサで、相手が施設の破壊行為に及ぶ可能性は大きい。これが防衛機能を備えた基地施設ならともかく、そうでない何かを護りながらの戦闘というのは大きな負担となる。欠点は完全に孤立無援となる点だが——郊外にあるとはいえ、〈L. C. ファクトリー〉周辺で大規模な戦闘があれば治安機構が気付く——防衛戦を避けられる利点の方が明らかに大きい。ロゼットはそう判断し、賛成——一、消極的賛成——一で、〈ハクメン〉を搬送し、街の外で迎撃撃つ案を練る事となった。

「——皆さん、そろそろ襲撃予測地点に入ります」
当然、搬送の情報は意図的に漏洩してある。仮の目的地までの距離を考えれば、待ち伏せがあつてもいい頃合いである。

「くれぐれも、自分の身を護る事を最優先してください」

オート・パイロット
自動操縦で進む〈グスタッフ〉に搬送される〈ハクメン〉のコクピットで、ロゼットは護衛を務める警備部の三人に告げた。正当防衛が成立する状況とはいえ、出来れば死人は出したくない。だが、相手を殺さないように戦うのは難易度が高く、むしろ足枷とな

ってなって自分や味方を死なせてしまう。

だからロゼットは本音を飲み込み、従業員の名を優先した。この状況で敵意を向けてくる相手でも死なせたくなないと告げるのは、愚かおろかで無責任だと知っているから。



サチエ・アサマがへL.C. ファクトリーへの発見した古代種を奪取するために雇やとった戦力——実にゾイド三十三機。その搭乗者の多くは元軍人もとや傭兵崩れくずといった、現在は盗賊たぬいの類たぐいに身を窶やつした者達だった。中にはへL.C. ファクトリーと繋がりのある傭兵に対して恨みを持つ同業者も、少なからず含まれていた。この業界で名が売れるというのは、そういう事なのかもしれない。

「……来たか」

襲撃部隊の一機——トラ型の中型高速戦用ゾイド（セイバータイガー）の搭乗者であるグレンは、リーダーが捉とらえた四つの機影を認めると、待ちくたびれた様子で独りごちた。

グレンはほぼならず者ならずものと言っていい集まりの中で、唯一まともな実力を持ったゾイド乗りだった。少なくとも、こんな非合法な仕事を請うけずとも、やっていけるだけの腕を持つ古強者ふるつわものである。

もつとも、彼を知る襲撃部隊の参加メンバーは、誰も疑問など浮かべなかったが。

「作戦開始だ。好きにやっついていいが、キツネ型だけは極力、無傷で確保しろ」

グレンの淡々とした指示が、通信機を介して襲撃部隊に伝わっていく。依頼者クライアントからは可能な限り無傷で確保しろと言われているが、最悪、ゾイドコアさえ無事ならいいとも言われている。

そもそも破落戸ゴロツキの寄せ集めだ。一応はグレンが指揮官という役割を与えられているが、連携など出来るはずもない。数で圧倒するのが、せいぜいだろう。案の定じょう、号令と共に有象無象の襲撃部隊は敵機に殺到し、しかし多すぎる数が仇あだとなり、早々に瓦解がかいを始めていた。

だが、むしろそれは想定内だ。数で圧倒するにも最低限、味方の足並みを揃そろえる必要がある。それが叶わないのであれば、数が多いだけの味方など、足手まといでしかない。グレンがすぐに踏み込まず、後方で様子見に徹していたのは、味方が間引かれるのを待ったためであった。

——グウルルル……。

低い唸り声うながグレンの耳朶じだを打つ。

愛機である〈セイバータイガー〉——〈アザフセ〉が我慢の限界を訴えかけている合図だ。

「ちよ・うど食いで・のありそ・うなが出・てきたな」

グレンが見つめる先にいたのは白いキツネ型の中型ゾイド——あれが目的のゾイドだろう。動いているところを見るに、有事に備えてパイロットを予め搭乗あらかじさせていたか、もしくは、〈I. C. ファクトリー〉側は襲撃自体を知っていたのかもしれない。

グレンにしてみれば、どうでもいい事だったが。

「存分に食らえ」

主あるじの許しを得て、〈アザフセ〉と呼ばれたトラ型ゾイドは大きく天に向かって咆哮を上げた。その際、頭部にある特徴的な二本の巨大な刃やいばが、ギラリと太陽光を反射させた。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『とある九尾狐の邂逅』ウルベス カム・アックス・アニメウルベス誕生篇（中編）をお届け致します。

一度は四十ページ弱の後編として完成したのですが、これでは足りない判断し、中編と後編に分け、後編を加筆修正する運びとなりました。

そういう理由で二話一挙掲載です。すでに予定より一ヶ月遅れているので、出し惜しみはしません。引き続き最後までご覧ください。

内容に関しても少しだけ。

〈アサマ製作所〉の社長と社長補佐、〈L.C.ファクトリー〉警備部の三人、傭兵のグレンと愛機〈アザフセ〉——これらは僕のオリジナルです。個人的には三人組の掛け合いが、思いのほか気に入っています。書きやすいし、書いていて楽しい。

グレンと〈アザフセ〉は後編で活躍しますので、乞うご期待。

後編はまるっと戦闘シーンです

謝辞は次回。

後半に続く——キートン山田っぽく思ったけど、今でも普通に『ちびまる子ちゃん』のナレーションは浸透しているのだろうか……？

2018 / 3 / 26 流遠亜沙

感想を書く

『Gallery of KAMISHIRO Side 2』ページに戻る